

# 「交流の世界地図」をひろげよう！ —大阪・関西万博に寄せて—

公益財団法人  
千里文化財団 理事長

中牧 弘允



いよいよ大阪・関西万博の開幕が目前に迫ってきました。55年ぶりに万博が大阪の地に戻ってきます。6,421万人に興奮と感動をあたえた世界最大級のイベントの再来です。

「夢よ、もう一度」とお祭り気分を迎える人もいるでしょう。「関西経済の起爆剤」に期待を寄せる人も多いにちがいありません。予約手続きが面倒だと苦情をもらす人も少なくないようです。何はともあれ、わくわく、どきどき、ひやひや、やれやれと固唾をのんで開幕を待つことになるでしょう。

19世紀半ばにはじまった万博は時代とともに成長・発展してきました。巨視的に見れば植民地を謳歌する時代から脱植民地化の時代へ、工業生産に邁進する時代から情報産業化の時代へ、世界地図の上では欧米が栄華をきわめる時代からアジア

や中東・イスラーム圏が台頭する時代へと変貌を遂げてきました。万博開催の主体も国家が依然中核を担っていますが、経済界が協を固め、都市や市民団体が主要な役割を果たすようになりました。

万博開催の意義も展示品評会から体験型催事へと変化し、参加者の意識も物珍しさから知的好奇心へと進化しているように思われます。千里文化財団が主催した昨秋のシンポジウムでも、シグネチャーパビリオンのひとつクラゲ館では「いのちの遊び場」と冠し、毎日、いろいろな人とのワークショップを開催し、障がい者や子ども、外国人なども参加して、郷土芸能や民族芸能を通じて人と人との交流をはかるのだと聞きました。そして、そこで体験した共創の仕組みそのものがレガシーになっていくとのアイディアに感銘を受けました。思えば、70年万博のアイディアのひとつ、「お祭り広場」も人々との交歓をはかる場でした。

前述のシンポジウムでもうひとつ印象に残ったのは「参加国マインド」と「開催国マインド」という対比です。日本の技術や文化を発信しようとする「参加国マインド」に比して、海外からの参加国を歓迎し、その伝統や取り組みを十分に発揮して

もらう「開催国マインド」が足りないのではないかと指摘でした。しかしながら、その一方で、共同館に展示スペースをもつ参加国（約100カ国）にはJICA（国際協力機構）を通じて支援の手が差し伸べられ、2カ月に及ぶワークショップを実施し、新たな展示形態の実現に向けて協力がなされていることが報告され、多少胸をなでおろしました。全国の自治体と参加国を結んでいく国際交流事業にも着手しているとのことでした。

「いのち輝く未来社会」は世界共通のテーマです。人類にとって、よりよい未来を構想することはこれまでも、またこれからも万博の永遠の課題です。最先端技術の実装だけでなく、人と人との「交流の世界地図」を拡大・深化させていきたいものです。ウエルカムバック！大阪の万博！

## 中牧 弘允(なかまき ひろちか)

公益財団法人千里文化財団理事長、吹田市立博物館特別館長、国立民族学博物館名誉教授。1947年、長野県生まれ。埼玉大学教養学部卒業、東京大学大学院博士課程修了(文学博士)。宗教人類学、経営人類学、比較文明学を中心に日本人移民や会社文化、暦文化について研究中。著書に『会社のカミ・ホトケー経営と宗教の人類学』（講談社、2006）、編著に『世界の暦文化事典』（丸善出版、2017）など。